

## 「国際貿易の原理

### ～A・スミスの絶対生産費説とD・リカードの比較生産費説」

立命館大学国際関係学部

板木 雅彦 教授

1957年生まれ。京都大学大学院経済学研究科修了。経済学博士。著書に『国際過剰資本の誕生』（ミネルヴァ書房）など。

私たちの身の回りには、さまざまな外国製品があふれています。たとえば、みんなが使っているノートやボールペンの多くも外国製品。いまや、外国でつくられたモノなしでは私たちの暮らしは成り立たなくなっています。しかし、そもそも国と国との間でなぜ貿易が行われるようになったのでしょうか。当たり前のように思っていますが、実は、そこには「あっ」と驚く事実が隠されています。たとえば、生産効率が高いからだけで貿易が発生するわけではありません。労働のディスカウントといった問題も潜んでいます。この「国際貿易論」は国際関係を理解するうえで基礎中の基礎。スミスやリカード、マルクスたち経済学の巨人たちの理論の一端を知ることでもあります。

Introduction	国際貿易論とはどのような学問か
Chapter1	絶対生産費説 アダム・スミスの貿易理論
Chapter2	リカードの比較生産費説の内容
Chapter3	比較生産費説のマルクスの解釈
Chapter4	絶対生産費説と比較生産費説の関係

## Introduction 国際貿易論とはどのような学問か

高校生のなかにも国際的な問題に関心をもっている人がたくさんいます。実は、今回のテーマである「国際貿易の原理（国際貿易論）」は、国際経済学や国際経営学などの基礎となる学問です。たとえば国際金融の問題も、世界中にあふれている貧困も、国際貿易が関係しています。

## Chapter1 絶対生産費説 アダム・スミスの貿易理論

いよいよアダム・スミスの登場。スミスは『国富論』を著し、古典経済学の父と呼ばれる人物です。彼の唱えた「絶対生産費説」は簡単に言うと「モノの価値は、生産のために必要な総労働時間によって決定される」というものです。イギリスのラシャ（繊維製品）とポルトガルのワインを例に、わかりやすくその理論のエッセンスを解説します。

## Chapter2 リカードの比較生産費説の内容

リカードはスミスより少し後に活躍した経済学者。彼の唱えた「比較生産費説」を簡単にいえば、「貿易は絶対優位・絶対劣位によって決定されるのではなく、比較優位・比較劣位によって決定される」「どの国も相対的にましな産業を輸出産業にすることができる」ということ。はスミスの理論ほど単純ではありませんが、これを理解できれば世界の動きはもっとクリアーに見えてきます。

## Chapter3 比較生産費説のマルクスの解釈

マルクスは誰もが知っている 19 世紀の偉大な思想家。私たちの社会に大きな影響を与えました。国際貿易についても、労働のディスカウント（不均衡労働量交換）という考えを使って、見事に説明しています。しかも、一見、無平等に見えながら、そのことによって世界の生産効率は高まっていく そのカラクリを見ていきましょう。

## Chapter4 絶対生産費説と比較生産費説の関係

絶対生産費説と比較生産費説 後に登場した比較生産費説が正しいと主我勝ちだが、決してそうではなく、労働をディスカウントした後の結果としてみれば、スミスの絶対的生産費説が成立していることがわかります。つまり、国際貿易はリカードの比較生産費説を根本的な原理としながら、表面的には、スミスの絶対生産費説の姿をとって現われる。スミスにリカード、マルスクたち経済学の巨人の考えが、この最終章で一気に結びつきます。